

観音物語 (23) 怨みが去る

じょうしゅうきょうかん じょ ふ い ぐん じん ちゆう ねん び かんの のんりき しゅうおん しつたい さん
 諍訟経官処 怖畏軍陣中 念彼観音力 衆怨悉退散
あらせ うっ もろもろ
 諍い訟たえて官処を経 怖畏なる軍陣の中にも 彼の観音の力を念ずれば 衆の怨み悉く退散せん

会社の課長が社長夫人へ社内の噂を伝えるために訪問してきた。

「社長さん、どうも会社がいい女ひとがいるみたいですよ」

社長夫人は目を丸くした。

「奥さまもご存じのように、先月の社員旅行で八十八名が温泉旅館に泊りました。その宴会の舞台上で社長と彼女が千昌夫の“星影のワルツ”をととても上手に歌って拍手喝采を受けました。別れの歌を社長は楽しそうに、彼女は悲しそうに歌っていました。宴会のあと二人は外出して一時間ほどしてから大きな紙袋を携えて帰って来ました。そして明るく朝、二人は団体バスには乗らずに私たちと別れました」

帰りの車内は“星影のワルツ”で持ちきりになった。課長が火に油を注いだからだ。

課長は社長の噂を熱心に語った。ところが夫人はヘラヘラと笑うばかりである。課長はその相手が自分の意中の女であることも明かした。夫人は頷いて破顔した。夫人のあの笑い方を気にしながら課長は辞退した。

社員旅行から三ヵ月後、噂の女子は退職。理由は出産のためである。社内ではますます社長と女子の噂が広がった。課長は怒り心頭に達している。このスキャンダルは面白い話題となって世間に流れた。取引先にも伝わり、注文のキャンセルが相次ぐようになった。新しい顧客の足も止まった。

この女子社員の求愛相手は社長の孫である。ところが、孫は大学生だ。これからまだまだ勉強しなければならぬという理由で社長夫婦は結婚に反対したのである。六歳年上の彼女は別れることを誓ってくれたから、あの温泉旅行の夜に社長は彼女を連れ出して土産をプレゼントしたというわけである。そして、翌日はバッグ専門店ブランド品を買った。

スキャンダルが世間に拡散すれば手の打ちようがない。社長の怪しい社員旅行の疑惑が風評になり、世間の誤解が解けないまま半年が過ぎようとしている。主人のことを心配した社長夫人は、応接間の窓際に飾られている白磁の観音像に祈った。

「観音さま、どうか主人の疑いが晴れますように…」

一心に祈っているときに、ピンポンと玄関の呼び鈴が鳴った。あの課長がまたやってきた。応接間には線香が観音像の足元でゆらいでいる。課長は紅茶をいただいて顔をあげた。そのとき、太陽光線が白磁の観音に反射して目に突き刺さった。課長は両手をついて謝罪した。

「申し訳ございません…。社長のお孫さんが彼女と別れたあとは、私たちは結婚して赤子を授かりました。しかし、お腹の子は社長かお孫さんではないかと疑っていました。DNA鑑定の結果、私の子であることが判明しました。本当に申し訳ございません。誤解をどうかお許しください」

しかし、社長の冤罪みづがせを弁明するには世間に噂が拡がりすぎていた。何が真実なのか従業員も疑念が晴れないままである。社長と課長の内密で、赤子は課長の子になったにちがいないという作り話までまことしなやかに流れている。

その一週間後、社員八十八名が白磁観音の前で正座をした。この席へ住職を招いて観音経の読み方を習い、観音物語の法話も傾聴して、全員が観音経をゆっくりと読んだ。住職は「衆怨悉退散、衆怨悉退散」と唱えながら祈念している。社長の辛い心情に涙を流す社員もいる。この法要が取引先にも伝わり、社長の冤罪がたちまち解けた。顧客が復活したことはいうまでもない。